

むらきとりで たたか  
村木砦の戦い（森岡）

現在、森岡地区に「取手」と呼ばれる地名が

ありますが、その北半分にあたるところが、む

かし、「村木砦」と呼ばれる砦のあったところ

です。このあたりは、むかしは、海に突き出し

た岬のような地形でした。

この砦は、戦国時代、今川義元が築いたもの

です。今川義元は、駿河（静岡県東部）を本拠に、

遠江（静岡県西部）・三河（愛知県東部）を支配下

におさめ、さらに織田信長のいる尾張（愛知県



西部）にまで手を伸ばしてきました。まず鳴海

城を従え、次いで大高城を占領、沓掛城ま

で手中におさめてしまいました。その上で、

織田信長と手を結ぶ水野信元を攻略する目的

で、当時の村木村の海に突き出した岬に砦を

築いたのです。天文二十二年、西暦一五五三年の

ことでした。

緒川と刈谷の間に入り込む衣ヶ浦の制海権

をにぎられ、その上に緒川城のすぐ北の領内に砦を作られたのではたまりません。さつそくのふもと、那古野城（今の名古屋城の位置）にいる信長のもとに使者を送りました。

「今川勢によって、緒川城のすぐ近くに砦を作られました。すみやかに救援をお願いしたい。」

知らせを受けた信長が那古野城の留守を美濃の齊藤道三に頼み、水野氏救援に出発したのは、明けて天文二十三年一月二十一日のことです。その夜は、熱田に泊まりました。夜中から強い風が吹きはじめ、二十二日朝にな

ってもやまず、熱田の海は高波が騒いでいました。

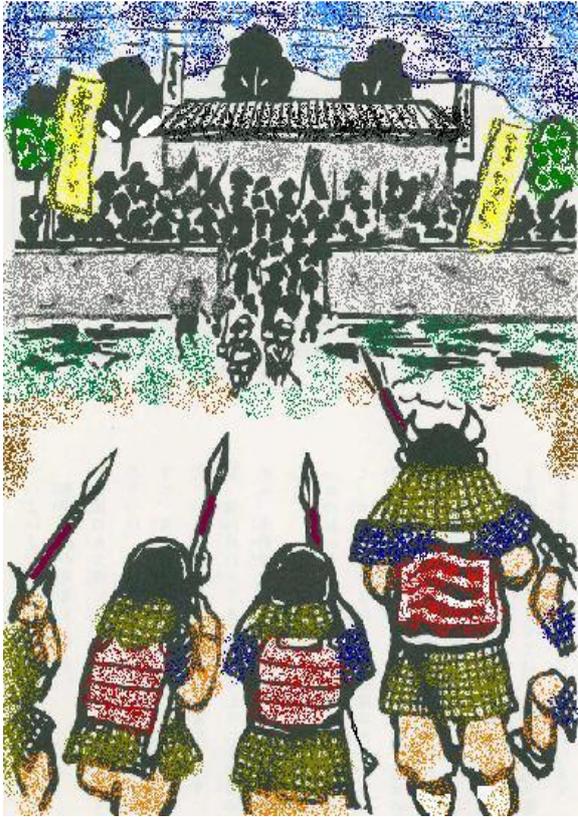
「申し上げます。大高・鳴海・沓掛の三城とも今川勢でしつかり固められております。陸路、村木砦に達することは、とても無理かと存じます。」

使者からの伝令が届きました。

「いよいよ、海に行く以外にないわい。それ！ 船頭、船の用意をしろ！」

白波の立つ海に船を出すのをしぶる船頭をしっかりと、しっかりと、無理矢理船を出させますと、信長の軍勢は、強い北西の風にあおられ

て、一気に知多半島西岸は横須賀のあたりに  
上陸、緒川城に入りました。そして二十四日の  
朝から、水野勢とともに村木砦の攻撃を開始し  
ました。



「おのおのがた、一に精出されよ、頼んだぞ。」  
と、大声で叫びながら、東の海岸大手からは、

水野軍、そして、西方からめ手からは、伯父の  
織田孫三郎に攻めさせ、信長自らは、攻めにく  
い南の大堀から攻撃をしかけました。

この時、信長は、新兵器の鉄砲を持参し、玉を  
家来の者に詰めさせては、取り替え取り替え、  
砦を守る今川勢を撃ちまくったといえます。激  
しい戦いは続き、死者は敵味方入りまじって山  
を築き、負傷者も続出しましたが、なかなか勝  
負がつきません。しかし、夕方になって、やつ  
と砦から笠を振り振り降参の合図があり、戦  
いは終わりました。

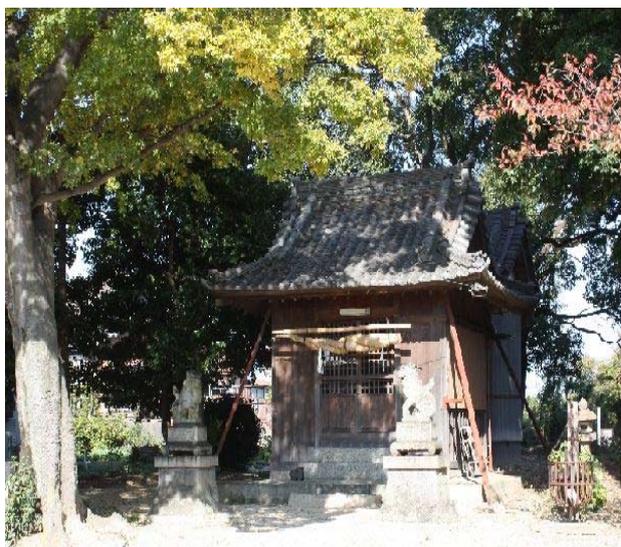
そして、砦は、水野軍が占領し、織田軍は、ひとまず砦より西方にある、現在、「飯喰場」という地名になっているところに引き上げ、そこで、戦勝の酒宴を開きました。「飯喰場」の地名は、腹をすかした織田勢が、そこでむさぼるように飯を食ったところからついたものだけです。

酒宴の席で、信長は、家臣の手を一人一人握りしめ、

「よくやってくれた、ご苦労であった。」

と、感涙を流しながらねぎらいの言葉をかけて回ったということです。この戦いは、若い信長

の運命をかけた大激戦だったので。取手にある八劔神社は、砦の戦いが終わって十七年後の元亀二年、西暦一五七一年に、水野信元の家来で村木村の清水八右衛門家重という人が、戦死者の霊をなぐさめるために建立したものです。



▲ やつるぎじんじゃ  
八劔神社